

東部支部夏季巡検会報告：日本一の溶岩樹形群を見に行こう

著者	浜田 俊
雑誌名	静岡地学
巻	92
ページ	33-35
発行年	2005-11-27
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00024986

東部支部夏季巡検会報告

日本一の溶岩樹型群を見に行こう

浜 田 俊

1. はじめに

平成17年8月21日(日) 齊藤朗三(吉原第三中学校校長) 会員を講師にお願いして、東白塚丸尾溶岩流中の溶岩樹型群の見学会を行った。当日会員以外に富士市内の中学校の理科教員の参加があり14名。十里木ドライブインに集まった。コース説明の後、最初の「十里木氷穴」に向かった。この十里木氷穴は別荘地内にある典型的な複合樹型である。

2. 溶岩樹型のでき方とタイプ

溶岩が森林帯を流れ下るとき、樹木は溶岩に閉じ込められる、およそ1,200~2,000°Cの玄武岩質溶岩によって木質部は焼失し、樹幹の形だけが残ることによってできる。これが溶岩樹型と呼ばれるものである。

3. タイプ

(1) 単一樹型：

竪型(直立型)：井戸型樹型・溶岩流の周りに盛り上がりがない。石柱型樹型・溶岩流の表面より高く持ち上がった樹型。

横臥型樹型：溶岩流流出前の風倒木や、溶岩流で倒された樹木が溶岩流に閉じ込められたもので胎内樹型と呼ばれるものが多い。

(2) 複合樹型：井戸型樹型や横臥樹型が一緒になったもので十里木氷穴は代表的なもの。

4. 黒塚溶岩流・カンス山溶岩流

十里木氷穴を作った溶岩流で、黒塚は日本ランド遊園地東側に位置し、標高1,270 mの側火山2,880±80年前頃に玄武岩質の溶岩を噴出した。その後1,210±14年前にカンス山から溶岩を噴出、溶岩流は、日本ランド溶岩流・黒塚溶岩流を覆いながら、西側は日本ランド遊園地、十里木西域に、東側は富士サファリパークにまで達している。黒塚溶岩流は十里木集落の北側に一部見られる。

5. 十里木氷穴

直径2.5 mの大木に5本の木が引かかってできた洞穴である。案内板には7本と表示されているが2本はどれなのかわからなかった。入り口には見事な不動岩樹型が見られる(図1)。樹齢300年の木

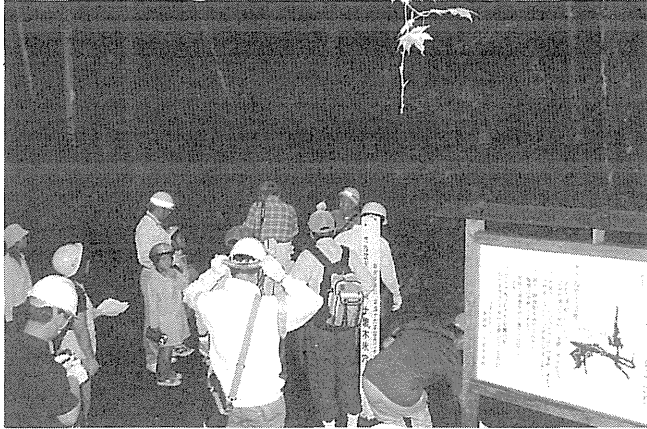


図1. 十里木氷穴で説明後入穴.

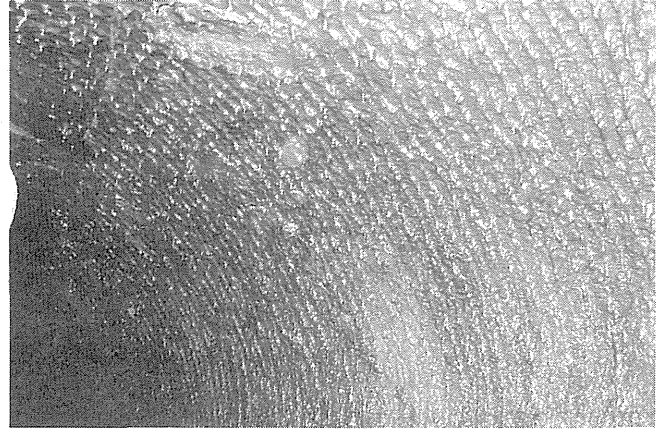


図2. 氷穴内の側壁の肋骨状溶岩.

を利用して作られた階段を降り内部に入ると、少し涼しく感じられる。洞穴内の樹型に空気が入り再溶融することにより、溶岩が壁を流れ下るときに出来た肋骨状の側壁を見ることが出来る（図2）。また、ガラス状のつるつるした木目状の模様、溶岩鍾乳石が天井や側壁にみられる（図3）。

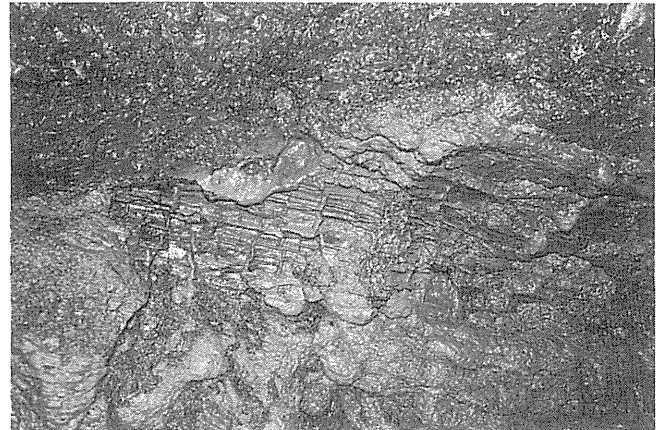


図3. 溶岩鍾乳石.

6. 東白塚の溶岩樹型群

日本ランド有料ゲートを通り、標高1,320 m 付近の高圧送電線沿いに歩く。鉄塔の5本目と6本目の間に多数の樹型を見ることが出来る。以前調査された溶岩樹型は約500個あまりにおよぶ、大きいものでは直径2 m、小さいもので12 cm、平均63 cm というデータもある。今回はその一部を見た、高まりをもった不動岩溶岩樹型もかなりの数になる、この高まりを調べることで溶岩の流れ方向が見えてくる（図4）。



図4. 井戸型溶岩樹型と不動岩溶岩樹型.

横臥樹型もかなりの数におよぶ。今回その一つを見た(図5)。木目模様も残っているのが見える。

東白塚溶岩樹型群は、東白塚丸尾溶岩流によって形成されている。最初粘性の低い玄武岩質の溶岩を噴出した。末期には火山砂礫を噴出している。比較的粘性の低い溶岩流のため、溶岩流は薄く1.5m~2.0mの厚さの層で溶岩樹型ができやすかったようで他の地区よりも多い。噴火の年代は、はっきりしていないようだが、小天狗溶岩流を覆っていることや、大淵溶岩流(1,750±70)に覆われていることから約2,000年前後と推定されている。



図5. 横臥樹型.

溶岩樹型の観察場所：静岡県のみ；東白塚丸尾，大淵丸尾富士見ヶ池，大淵丸尾火口，印野胎内など。

今回の巡検には、中学校の理科教員の参加があったことは意義あることで、今後もこのような巡検会であってほしい。

引用文献

川平裕昭 (1994)：東部支部巡検会の報告：富士火山溶岩樹型ほか。静岡地学69, 31-32.